

## 建築ジャーナル



2018年10月号  
No. 1271

風地をはじめ、死にかかある場所は、時間中、世代を超える水廻り、人が訪れることで存在しえる場所性という意味で、どこか「建築」化している。建築家が死者と出会う場所を設計することは、自然なのかもしれない。お墓は死後に入る場所というだけではない。生者が死者と出会う場所でもある。さらに、故人の遺志を尊重する自然葬という考え方もある。

大切な人の死を思うとき、死を親密に感じるとき、死の先が探かぎ上がる。

## 〈特集〉

風地・坂本啓と知念寺共同書

風の丘・坂本啓墓地

評議の自由をすすめる会

秩父動物園動物管理施設/秩山の墓 礼拝堂

静水川霊園礼拝堂・休憩棟

新宮環境文化館直葬亭

山梨知彦

大宇根弘司

佐々木直人

水谷敬博

西宮コーボス

千代田区総合高砂納骨

霊柩搬送設備問題

高知「定常のすゝめ」

三島製炭業団の危機

## 〈連載〉

五十嵐太郎

栗原誠一郎

坂口恭平

宮本祥子

志野謙司

吉岡 保

松岡 洋

山崎 亮



坂口恭平

第八回

きになるばしょ むかしのかん

建築家がデザインする  
死とかわる空間  
(礼拝堂・休憩棟)

## 「狭山湖畔霊園管理休憩棟／狭山の森 礼拝堂」 「猪名川霊園礼拝堂・休憩棟」



### 人種や宗教を問わない祈りの場

中村拓志とデイヴィッド・チップパーフィールド  
日英の建築家による無宗教の祈りの場。  
建て主に聞く、建築家と施工者との三位一体の協働、その思想

インタビュー……大澤秀行 墓園普及会 理事長

「建築をつくるにあたり、建て主として勉強しました。大きな費用を使うものですし、利用者に対して責任がありますから」。

そう話すのは、「狭山湖畔霊園管理休憩棟／狭山の森 礼拝堂」(2013年／2014年)と「猪名川霊園礼拝堂・休憩棟」(2017年)の建て主である墓園普及会の理事長、大澤秀行。前者は中村拓志&NAP建築設計事務所、後者はデイヴィッド・チップパーフィールドの設計による。世界中から見学者が訪れるこの美しい建築たちはどのようなように生まれたのか。その思想と協働について聞いた。

「財団40周年記念事業として、利用者のためになり、歴史に残るようなことをやりたいと考えたときに思いついたのが、財団と同じ年に出来た狭山湖畔霊園の施設の建て替えてでした」。

現代美術のコレクターでもある大澤は、四半世紀にわ

狭山の森 礼拝堂  
祈りの対象は普遍的な森。  
祭壇は森を背負って配置されている。  
床面には森に向かって下る緩い傾斜をつけ、稲井石の割肌や目地が森の奥の消失点に伸びることで意識を森へいざなう。  
構造兼仕上げ材としての架構は、合掌造りの現代解釈。祈りの姿勢を促す

たるその経験から、いい建築をたくさん見ることが重要と考え、世界中のありとあらゆる建築を見に行った。話題に上っただけでも、アルヴァ・アアルト、ピーター・ズントー、ルイス・バラガン、フェリックス・キャンデラ、ル・コルビュジエ、ヘルツォーク&ド・ムーロン、安藤忠雄、丹下健三、大谷幸夫…と語り尽くせないほどの建築を見た。

「素晴らしい建築の数々を見て感じたのは、私みたいな素人でも感動して打ち震えるのが本物で、理屈ではないということ。そして、それは建築も美術も同じだということでした」。

そんななか、メキシコで半日探して見つけたキャンデラによる小さなチャペルでの体験から大きな影響を受けた。

「中に入ったら涙がポロポロこぼれてきちゃって、理屈を超えてなにか見えないものに守られているような気がしてありがたかったんです」。

この体験から、人種も宗派も超えた平和な気持ちで



猪名川霊園礼拝堂  
宗派を問わない祈りの場として、最小限の暖房と照明しかない、無垢で静謐な空間。  
祭壇に向かって左右から緑を見せる「樹々の庭」の境界を感じさせないよう、透明度の高いガラスを使用。  
祭壇上部のスリットからは樹々の緑色を取り込んだ光が差し込む

設計条件は、設計者の創造性をつぶさないようにたったひとつだけにした。それは、「永遠に進化し続ける、エイジングに耐えうる建物であること」。これは「墓園」が永続性をもった場所であることにも起因する。コンペ

の勝者が礼拝堂を手掛ける権利を得るという条件にした。管理休憩棟を先につくることで、各種機能をうまく入れつつ美しく設計できる人を見極めようとしたからだ。

選定にはスタッフ全員が参加した。これが「建築を惹き込み、育てる」ことにつながっている。訪れた二つの霊園では、スタッフが建築の説明をしながら案内をしてくれて、「こんな傷あったかな」、などと話し合いながら建築を気遣う姿も数度見かけた。建て主側が、これだけの愛情をもって、施工方法まで説明できることには見学者もみな驚くという。

「利用者が誇りに思ってくれることで地域の宝になる。そして、地域の宝が県の宝に、日本の宝になってそれが世界の宝になる。建築って人に愛されればこそ永遠性が出てくるものですね。建築は建ったときにゴールじゃない。スタッフみんなで、子どもを育てるように惹き込んでいます」。

建て主が美術コレクターなのに、これらの建築には人間がつくった美術作品は置いていない。それは、ここにはすでに建築と偉大な芸術である自然が織りなす関係性があるからだと言う。狭山湖畔霊園の図録に記された大澤による「変化の連続こそ永遠である」という言葉には、変化しないことが永遠ではなくて、一瞬の変化が積み重なって永遠になるという意味がある。

なぜデイヴィッド・チップパーフィールドが設計を引き受けたのか

狭山湖畔霊園の施工中に、猪名川霊園の施設建て替え計画がスタートした。実は、猪名川霊園は大澤が初めて勤めた思い入れのある場所でもある。小さな管理事務所に一年間寝泊まりしていたという。なぜ、世界中で大プロジェクトが進行するイギリスの著名な建築家が日本のこの小規模なプロジェクトの設計を引き受けたのか？

「友人のトマス・シュトルトという写真家が、狭山のアイデア段階から賛同してくれていました。彼から、ぜひ自分の友人たちにも紹介したいから、思想と骨子を記したテキストブックを英語でつくってほしいと頼まれたんです」。

その友人の一人が、デイヴィッド・チップパーフィールドだった。トマスから、それを読んでデイヴィッドが感動して

共有する祈りの場をつくらうと決めた。こういった祈りの場は世界でも例がない。そして、アアルトの教会で記名帳を見て、毎日のように世界中から誰かが来ていることを知る。いい建築には、こうして人が訪れるだけの力があると確信したという。

40歳以下の若手建築家によるコンペ

特筆すべきは、狭山湖畔霊園管理休憩棟が40歳以下の若手建築家4組による指名コンペだということだ。要綱の作成から設計者の選定まで、墓園普及会が行った。

「コンペのやり方なんてわからないから、暗中模索です。勉強するために、建築学会の図書館を使いたくて会員になりました」とはにかむ。2010年当時に選出した4名は、勝者の中村拓志をはじめ、石上純也、永山祐子、平田晃久。その勉強量と先見の明に驚く。若手に限定した理由は、美術のコレクションを通じた体験にあった。

「ソーホーのまだ名の知れていない、食うや食わずやの作家を訪ねたり、そういう人たちと話をしたり食事をしていて、人生をシェアしているような感覚がありました」。

そのコミュニケーションが素晴らしいと感じ、プロジェクトはそこに携わる人が成長していくことが大事だと思ったと言う。

いと聞いた。大澤もベルリンの「ノイエス・ムゼウム」を見て、古いものと新しいもので違う次元のものをづくり出した姿に感動していたこともあり、早速イギリスに会いに行った。「実は次のプロジェクトがある」と言ったら、デイヴィッドは「僕がやる。建物に興味があるからやりたい」と即答だったと言う。多忙を極めるデイヴィッド、世界中に会いに行き、20数回対面で話したという。設計期間は3年にものぼる。

「デイヴィッドはより良くなるとわかれば、プランを消してまたさっと描き直すんですけど、アイデアが泉のように出てくる。猪名川は最初、2つの建物だったんです。私は、機能が要求される事務棟と礼拝堂を1つの建物にするのは難しいと思い込んでいました。でも、ほぼデザインが決まり、すでに雑誌で発表もした段階で、『ゼロからやり直していいか』とデイヴィッドが言った。妥協をせずに検討して、だんだんと今のひとつながりの建物になっていきました」。

これが実現できたのは、「施工が始まってからの変更はお客様に迷惑がかかる」とプランが決定するまで納期を決めなかったことにある。シンプルなことだが、国家プロジェクトでもできていないことを私人が実現していることに感服する。

大切にしたのは建て主、設計者、施工者の三位一体。「施工中は『真直心で、人に感動と安らぎを与える建物をつくろう!!』というスローガンを掲げました。建築が三者のいがみあいできていけると、それは訪れた人に伝わってしまう。安らぎや癒しを与える空間にするためには三者が一体となるのが不可欠です」。

狭山では、「最後の5分まで変化を恐れず中村さんとやってきたので後悔はない」と言い、完成した時には、「何かに導かれて奇跡的にできた」と三者で思いをともにした。礼拝堂の施工者である清水建設の担当者



**狭山湖畔霊園管理休憩棟**  
この建築には「福今」という名前がある。これは「今」を強調する言葉。お墓参りから、こちら側へ帰ってきた「ただいま」の意味も込めている。天井の高さは入口付近では招き入れるように低く、ラウンジにかけて高くなる。水盤からの反射は、全てことなる長さ・形の梁に映り、黒漆喰磨きの壁には緑の帯が走る。これらは「今」の一瞬を感じてもらおうための演出だ

には「もう二度とつくれません」と言われたほど。

猪名川では、最初は大御所を前に構えていた施工者も「デイビットの思うようにやろう」と、徐々にそういう雰囲気がつくれたという。上棟式では、デイヴィッドはなおらいの席にまず職人を呼んで、ビール片手に乾杯し、感謝したという。

### 「建築の力」が墓地余りを食い止める

「次は?」と思わず聞いてしまったら、みんなに必ず聞かれると苦笑する。

「もう悔いはないということまで、ものすごいエネルギーをかけて建築をつくってきたので、体もボロボロというのものもあるんですが…。本を読んだり、礼拝堂で野点をしたり、次は自分がこの空間を味わいたいと思っています。まだまだ自分が知り得ない味わいがある。それを感じたいです」。

無論、墓園を経営するにあたり、施設の管理は業務の一角に過ぎない。やるべきことはたくさんある。

実は今、霊園業界は「墓地余り」という大きな変化を



**狭山の森 礼拝堂**  
雪の日。季節によっても表情が変わる撮影=狭山湖畔霊園所長 山口貴正



2万1千枚の屋根材は、同じ埼玉県内にある「鑄物のまち」川口で一枚一枚鑄造された。大澤さんは中村氏とともに工場に通い、厚さ4mmという薄さを実現するため、研究開発に一年半を費やした。エイジングし、苔や虫の這う跡が豊かな変化をもたらしている



**猪名川霊園礼拝堂・休憩棟**  
「この階段のラインこそが、建築の配置を決定づける軸線」とデイヴィッドがコメントしている。ひな壇上に構成された霊園の中央を1本の階段が頂上の納骨堂へとつなぐ。階段の真ん中には山からの水が流れ、水盤にたまり、そこから地下を通り小川へと向かう。水系も新しくデザインされた



「山野草の庭」は日本在来の67種におよぶ山野草や低木からなる。岩立マーシャ+上村景観設計により、年間を通しての変化が計算されている。スタッフが精魂を込めて手入れしている



全景。左手前から礼拝堂、事務棟、エントランスを挟んでメモリアルルーム、ビジターラウンジ。壁、床、屋根は赤土色のカラーコンクリートを採用し、床は磨き仕上げ、壁と屋根はサンドブラスト仕上げ。周囲の景色や既存の石段に馴染む赤色の岩がそこに隆起してきたような印象を受ける

迎えている。

霊園は社会の構造の変化から直接影響を受ける。家族構成も価値観も変わる現代社会、墓を次ぐ人がいない、出生率の低下、都市への人口流入など、さまざまな要因で「墓地変換」が起こっているのだ。なじみのある言葉でいうと「墓仕舞い」である。古い霊園であればあるほどこれが深刻で、収入が管理料のみでは運営はギリギリだ。時代にあわせていかなければ、たちまち経営は立ち行かなくなる。単に利益の追求ではない。墓園には、未来永劫、場を守る責任がある。財政的にもしっかしなければならない。

「社会問題になっていくと思いますが、そういう話をしても、業界の人たちは潮目が変わっていることを認識したくなくて、聞こえないふりをする。冷静になって、社会を正面からとらえて何が起きているのか把握するべきで、私が背中で見せるしかないと思いました」。

そこで、墓園普及会は「変換墓地の再貸付」という新しいビジネスモデルを考え、積極的に変換を受け、墓地の循環を図っている。お墓は分譲ではなく永代に使用する権利を貸し付けるもの。変換された墓は再度貸し付けることが理論上は可能だが、マンションや建て売り住宅と同じで、中古より新しいお墓に人気が集まる。古くても「ここに入りたい」と思ってもらえる霊園にするため、施設を充実させて付加価値をつけることを考えた。狭山は抽選をするまでになり、業界に道を示している。

墓園普及会では、施設の見学を積極的に受け入れている。建築、空間から体で受けたメッセージをもって帰ってもらうことで、「開かれた祈りの場」が日本中、そして世界に広がることを願っているからだ。

「宗教、人種間の対立で戦争が起きる、それは凄く悲しいことです。世界という池に『人種や宗教を問わない祈りの場』という小石を投げて、その波紋が広がっていけばいいと思っています。世界の一隅でもいいから照らせるといい」。

すでに、「狭山の森 礼拝堂」には、世界44カ国から見学者が訪れている。アラブから来た人は「ここは不思議なところ、気持ちが平和になる」と言ってくれたという。昨年5月に竣工した「猪名川霊園礼拝堂・休憩棟」にも約300組700名以上が見学を訪れている。

——優しく力強い波紋はもう広がっている。

(2018年6月22日、狭山湖畔霊園にてインタビュー収録  
文・写真=編集部 雨宮)

#### ●概要

- 狭山湖畔霊園管理休憩棟／狭山の森 礼拝堂
- 【設計】中村拓志 & NAP 建築設計事務所
- 【所在地】埼玉県所沢市
- 【竣工】管理休憩棟 = 2013年  
狭山の森 礼拝堂 = 2014年
- 猪名川霊園礼拝堂・休憩棟
- 【設計】デイヴィッド チッパーフィールド アーキテクト
- 【所在地】兵庫県川辺郡猪名川町
- 【竣工】2017年
- ◆見学については事前の連絡が必要
- 【TEL】04-2922-4411 (狭山湖畔霊園)  
072-769-0543 (猪名川霊園)
- 【受付時間】9:00-16:00 (17:00 閉館)
- 【定休日】水曜

